

象

2012 Vol.32



象

第 32 号 も く じ

挨拶

大学の法人化を控えて

建 畠 哲 3

退任挨拶

芸大あの日々

潮 江 宏 三 6

「芸大ならではの」

田 畑 千 秋 10

美大のこと、芸大のこと、自分と作品のこと

内 藤 英 治 12

ラビリンスの愉悅

中 井 恒 夫 16

新任紹介

山に臨む部屋から

高 林 弘 実 19

SILENT@KCUA（サイレント・アクア）開催について

サイレント・アクア実行委員、美術研究科長

鶴 田 憲 次 21

『生きるための手遊びを探る』

～宮城県で学生達と手遊びカフェを開催～

日下部 雅 生 25

学内消息

39

会員消息

41

同窓会賞

47



大学の法人化を控えて

京都市立芸術大学長 建 畠 哲

学長に就任して、早や一年になります。今年四月の公立大学法人化を控えた大変な時期であることは覚悟していましたが、その準備作業に追われるばかりではなく、東日本の大震災への対応という“想定外”の事態もあって、新米の学長には正直なところ五里霧中のなかを進まざるをえないような日々でした。何とか大過なくやってこられたのも、同窓会の方々のお力添えがあったからで、深く感謝しております。一年のサイクルを経験して、ようやく舵の取り方も見えてきたので、法人化が本学の発展の基盤となるよう、そろそろ本格始動しなければならないと気持ちを引き締めているところです。

さて青天の霹靂ともいべき学長就任のご依頼をお引き受けしたのは、京都芸大の栄光の伝統に畏敬の念をもっていたからですが、また久しぶりに故郷の京都に帰ることができるという熱い思いもありました。生まれた家は御所の東側にありましたが、そこで過ごした幼年時代は、いま思い返せばまさに夢のような我が人生の黄金の日々でした。大阪の国立国際美術館の学芸員をしていた十五年間、あえて伏見の公務員宿舎から通うことにしたのも、住まいは京都ということにこだわったからです。今、二十年ぶりにこの町に戻ってくることができたのは、実に幸運なことだといわなければなりません。

もっとも生家はだいぶ前に取り壊されてしまい、母校の春日小学校もすでに廃校になっています。伏見の宿舎も更地になってしまいました。残念なことに、私が住んでいたという直接の証しは、もはや残っていません。それでもなお京都は私のかげがえのない故郷であって、再び住み始めたこの町に、京都芸大を核にした新たな思い出を刻んでいこうと期待をふくらませているのです。

文化芸術の重厚な伝統と、新しい価値の創出や独創性を重んじる気風とが一体化した、他に類例のない町——。考えてみれば京都の素晴らしさは、そのまま芸大の特質をなしているといえるのではないのでしょうか。周知のように本学は一昨年、創立130周年を迎えました。同窓会の皆様の支えを受けて、さまざまな記念行事が開催されましたが、日本の芸術系大学としては最も早く開学した本学の存在感を改めて市民の方々に認識していただけたのではないかと自負しております。しかし本学の誇りは歴史の厚みに加えて、新たな芸術の発信基地としての息

吹に満ちているという点にもあるのです。間近かに迫った法人化は民間的な経営の方法を導入した効率的な大学運営を目ざすものであると同時に、このような本学のならではの魅力をさらに発展させるものでもなければならぬでしょう。

大学は一義的には教育研究機関とされています。京都芸大もその例外ではありませんが、一般の大学とは異なって、アーティストとアーティストを目ざす若者たちの共同体としてのユニークな性格をも有しています。京都という文化芸術都市に位置するという特権を、どのように自らの教育研究のユニークさに生かしていくかが、今後の大きな課題であるに違いありません。そのことはまた京都の将来にとっても大きな意味を持っているはずです。

京都にはさまざまな文化資源があります。それらは観光のための資源としては国際的に知られていても、文化的な生産には十分に生かし切れていないのが実情です。西陣織や清水焼のように廃絶の危機にさらされている分野も少なくありません。京都が歴史遺産の魅力だけで生きていくのか、新たな文化の発信基地であり続けることができるのかの分かれ目は、こうした文化資源を発展的に継承できるのか、今日的な生産性に結び付けられるのかにかかっているでしょう。

同窓会の諸先輩には“釈迦に説法”になってしまうかもしれませんが、歴史に学ぶということ、温故知新ということは、過去の遺産をそのままに継承することではありません。むしろその偉大な文化がどのようにして生まれたのか、どのような新しさを歴史に付け加えたのかを学ぶことなのです。たとえば富本憲吉なら富本憲吉に学ぶということが、彼の意匠をただ継承することだけを意味するなら、単なる繰り返しに終わってしまいます。そうではなく富本憲吉がどのようにして新しさを生み出したかという秘密に学ぶこと、もし模倣という言葉を使うなら、彼の意匠を模倣するのではなく、彼が過去との差異を生み出した傑出した方法自体を解明し模倣することなのです。

もちろん過去の文化を記録し伝承することは大切な仕事です。まずはきちんとしたアーカイブがなければなりません。教育研究機関である大学には、そのアーカイブを新たな価値の創出に結び付けること、時代を変革しうる人材を送り出すことが期待されているのです。“アーティストとアーティストを目ざす若者たちの共同体”である芸術大学は、そのような“創造のためのアーカイブ”たるにふさわしい機関であり、また京都という町にこそ、そうした大学の役割が要請されているといってもよいでしょう。

法人化の目的の一つは市民に顔の見える大学という点にあります。本学では法人化に先駆けて昨年度から、都心の堀川御池に芸大ギャラリー（通称アクア）をスタートさせましたが、ここで開催された「サイレント・アクア」と称した東北

震災救援のためのチャリティー・オークション（同窓会からも多数の出品をいただきました）に多くの市民が入札して下さるなど、幸いにして本学の活動と町とをつなぐ接点として親しまれつつあります。また京都近代美術館でのロビー・コンサートなど、学外でのイベント活動もきわめて活発になってきています。

私たちは伝統の中で培われてきた本学のオーソドックスな軸線を貫きつつも、大学院の拡充、アートマネジメントにかかわる人材の養成、入試方法の改善、広報活動の充実などの多様な変革に取り組んでいくつもりでおります。また将来構想にある都心部への移転をどう実現するかという、より大きな課題にも対処していかなければなりません。方針を過たないよう、折に触れて先輩諸兄のご助言をいただく必要があろうかとも存じます。今後ともよろしくお願い申し上げます。



芸大あの日々

総合芸術学研究室・教授 潮 江 宏 三

昭和49年4月、わたしは、西洋美術史担当の美術学部助手として赴任しました。京都大学の博士課程の年限を終えたばかりで、まだ27歳でした。思い返してみれば、ほとんど実績のない雛っ子を終身雇用の専任教員として雇うなんて、恐ろしいことです。大胆なことをする学校だとも思いました。論文を読んで面白かったから決めたと後で聞かされましたが、論文と言っても、修士論文と学会論文の2本、本当に危ない話です。色々とりサーチはしたらしいですが、当時は面接もありませんでしたのでどんな性格の奴かも見当がつかないわけですから。今日の人事採用の仕組みや条件からしたら、全く考えられない話です。時代がそれほど大らかだったということでしょうし、いい言い方をすれば、芸大が自分の眼によほど自信を持っていたということなのでしょう。

採用されて来てみると、驚きの連続でした。正面の化粧コンクリートの剥がれた本館の建物は古く、黒光りする木製の階段には明らかに二つの凹みが刻まれているし、研究室は共同部屋の職員室風、トイレにいたっては建物の外にあり、尻には風が吹きすさぶ始末。しかも、本館前には、少しくたびれたプレハブ校舎が建っている！しかし、戦後の田舎育ちでしたから、小学時代の経験からこの野外風トイレには案外と耐えられましたし、ベビーブームの世代でもありましたから、プレハブ校舎には馴染みがありました。とはいっても、さすがに個人スペースのない研究室は、これで大学？といった感想を打ち消すことはできませんでした。それでも楢円の大きなテーブルで聞いた先輩の先生方の話は楽しかった。定年に近かった某先生の数々の下ネタ話や精力維持の創意工夫話、男盛りの某先生の女性追跡話、今なら、なんとかハラスメントでみんなレッド・カードものです。後者に至ってはストーカー行為で逮捕されるかもしれません。もちろん、いつも何々大笑する先生の文明論、前任の先生の探検話等々、知恵の宝物もあちこちに転がっていました。それにしても、今にして思えば、あんな古びた場所から、ニューギニア調査、インドネシア調査、四国八十八カ寺調査、わたし自身も参加した西アジア伝統工芸調査といった大業績が行われたのですから、どこにそのエネルギーはあったのでしょうか。

そのように、その見かけとは異なり、あの頃の大学には、いい意味での緊張感が

みなぎり、現状に安住しない気概がそこここから感じ取れました。これこそがわたしにとってはこの大学に来てよかったと思うところでした。それもそのはず、当時の大学の御多分にも洩れず、芸大でも学生紛争があり、学生の要求に対して空手形の声明文ではなく、学制改革でもって応えようとし、その実現に向けて努力を重ねているところでした。いわゆる「美術学部改革案」です。そこには、入試改革、科専攻組織の改組や履修方法の抜本的変更を含む学制改革、さらには教員と学生、教員相互間の人間関係についてもそれぞれ個に還元して平等対等の関係を構築することまで謳われていました。この「改革案」の取りまとめのリーダーシップをとったのが、これは名前を出していいと思いますが、木村重信先生であり、この案の根底にある理想的あり方を徹底して貫いた部分については、当時美学を担当しておられた故石田正先生の力が与って大きかったと言われています。

その後、この「改革案」は、大雑把に言えば、現実対処の名目で改訂が繰り返され、現在に至っています。その主な問題には、専門性の確保が保障されていないこと、そして学生の側で主体性の後退が顕著になってきた等々がありました。が、実態的には、正直なところ、教員の側の精神的な後退も大きかったと思われます。この「改革案」の実践には自身に常に異体験への心構えが必要であったし、専門カリキュラムについては入門的な手ほどきだけしかできない未達成感も内心忸怩たるものがあつたでしょう。近くにいてよく通じ合う専門家同士の人間関係の心地よさも打ち捨て難かつたのでしょう。改革の興奮から日常の平静へと心理も転換し、教員の5年ごとの自己評価という、当時では画期的な先進的制度もいつの間にか放置されてしまいました。何よりも、学生をまったく色づけしないことを前提で教育に着手し、その後も各学生の選択に任せるという制度と専門性との擦り合わせが難しかったのだと思われます。この時も、予算的裏付けがなかったことが推進力に欠けた理由だったでしょう。

しかし、この「改革案」の個に還るという考え方は、美術学部の教員の人間関係を大きく変化させました。職階の上下関係なしに教員が平等に意見を述べる機運を作り出しました。わたしがこの大学に来た頃は、自身も多少生意気なところもあって、そうした雰囲気の後押しされて若造のくせに教授会でよく発言をしていました。こうした美術学部教授会の雰囲気は、自由闊達でいいものでした。まだまだ講座制における教授の支配が大学では当たり前だった頃に、これは大きな改革だったと言えます。各専攻の研究室を相互の共通性でもって平等に見ようとする姿勢も、専門の障壁を超えて話し合う雰囲気を形成していったと思います。現実的な対応で後退したとはいえ、この「改革案」が、戦前の雰囲気を引きずったままの戦後の美術大学・芸術大学美術学部を特徴ある性格を持った美術学部

変えたことは大きな事実でした。そうした時代に教員となって、それに自分も参画できたことは、大きな誇りです。

とはいえ、20年、30年と経過して、「改革案」の副産物として今も残り、組織としての美術学部を悩ませている問題もないではありません。これについて一言申しておきます。一番大きなことは、個への還元が行き過ぎて、組織的な実行へと意見や力が集約されず、組織としての執行体制が空洞化する傾向があることです。これも、美術学部、ひいては芸大のキャラクターとなっています。それぞれの時点ではわたしも気がつきませんでした、永年いてようやくわかるのですが、そうしたことが起こる度に、これまで芸大はいくつかの大きなチャンスを逃してきたと思います。逆に、1980年の移転事業が成功したのは、梅原学長の行動に当時の教員たちが全幅の信頼を置いて、物心両面で支えた力が、マイナスから出発を大きくプラスに変えた力になったと思います。それと逆の事態が、つまり大学の明確な意志が表明できず、チャンスの逃してきた、ということがその後は多くあったように思います。そのうちの大きなものは、市の財政が豊かな頃に芸大の財政が豊かになったかと言うと、そうはならなかったことがそれだと思います。

個々の意見が責任感と持続性をもって集約されて、組織としての実りある実行へと結びつくように向かわなければ、個の尊重も結局は自己顕示と恣意に終わるのではないのでしょうか。また、この個の尊重と平等という考え方は、明らかに組織的に責任ある立場の者の権限を制限し、どちらかと言うとそれを監視する制度へと組織化されて来ていますが、このことが悪い出方をして、どちらかと言うと不信の連鎖となって執行権限者の権限を空洞化させ、組織の可動性を脆弱化させている状況が現在があります。このような自己顕示や責任なき恣意、そして不信の連鎖を失くし、前向きに力を結集しなければ、せっかくの40年前の大きな方向転換の経験も宝の持ち腐れになると、今は、深く懸念しています。それよりも何よりも、為にする不信や否定は、むしろ逆に執行権限者の見えない所での策謀を招きやすいことを、これは一般的懸念として、敢えて指摘しておきたいと思います。公理公論に帰し、順次決定し積み上げ決定し、責任ある者が執行するという、普通の民主的手続きが「改革案」の述べられていない部分の大前提としてあったはずです。

少し棘のあるわたしの思い出話も最後になりますが、この「改革案」の現時点での問題点も指摘しておきます。40年も経過して、たとえば「塗装」は「漆工」に変わり、現在は制度上そのような形態をとっていませんが、「改革案」は、学制において、素材別の研究室編成を前提としていました。これは、言うまでもなく60年代、70年代芸術に特徴的な観点を含んだモダニズム的芸術概念に依拠した

ものです。「改革案」で設置された「ガイダンス」もさまざまな素材を体験して自己の専門を決定するという考え方に基づいたもので、それが現在の「総合基礎実技」へと続いています。「改革案」が、その意味では、本当にコンテンポラリーな制度だったという意味で、今でもその斬新さに驚くのですが、この考え方は、残念なことに、国際的共通性を前提に文化の固有性を排除したところに成り込んでいるものでもあります。今や、自明の理ですが、真のグローバル性や国際性は、この文化の固有性なくしては成り立ちません。そのことに思い致すとき、たとえば、実際に成果を生んでいる「総合基礎」もまた、その制度を護持するだけではなく、新たな考え方でもって基礎づけられなければならないと思います。

守りも大事ですが、それだけでなく、今が、新しい芸大像を作る機会のはずです。超楽観主義者のわたしはそう思います。これからの先生方に期待しています。大昔の話から強引に今の話につなげてわかりにくかったと思います。それほど長くいたわけで、その間、ほんとうにいろいろありました。個々には特に迷惑をおかけした方もあったと思いますが、その点につきましてはどうぞご寛恕ください。結びに、先輩の先生方、現役の教員諸兄、卒業生並びに学生諸君に、感謝の念をもって締めくくりたいと思います。充実した教員生活でした。本当にありがとうございました。



「芸大ならではの」

英語・アメリカ文学教授 田 畑 千 秋

2012年3月をもって芸大を退職することになった。定年を待たずになぜ1年早く辞めることになったか、それは一言で言えば一言では言い尽くせない、と言うことにつきる。

わたしが着任したのは芸大が今熊野にあった1976年だから36年勤続したことになる。そのころの教員でそのまま在職している方は数えるほどになった。亡くなった先生方も多い。教え子も含めて当時学生だった人たちがのちに本学教員になったひとは何人もいる。月並みだが歳月の流れの速さに驚く。

芸大の前は3年間神戸の親和女子大にいた。のちに藤原紀香を輩出した大学である。しまった、辞めるのがちょっと早かったか——と思ったことはない。

花の女子大をあとにして芸大に来てまずキャンパスの古さ、汚さ、狭さには驚いた。毛筆で書かれた古びた木の看板が門柱に掛けられていた、その門は最初裏門だと思った。ほかに門らしいものを探したが見当たらない。やはりあれが正門なのか。今熊野にいる3年間毎年最初の授業でそんな印象を学生に伝えた。だが移転を間近に控えていたことだし、みんなもう少しの辛抱だと思っていたのか、文句を聞いた覚えはあまりない。

わたしはそういう劣悪な施設や環境のことよりも、学生気質や先生方の個性の豊かさとともに美術作品を毎日のように目に触れる機会を得られたことを喜んだ。実際それは今日に至るまでずっと続いていることで、画廊・美術館巡りにために足を運んできた。京阪神は言うに及ばず東は東京、西は宇部市の野外彫刻展まで出かけたこともある。東京では三尾公三先生の個展、宇部では秋山・松井両先生が出品されていると聞き及び、買ったばかりの新車にひとり乗り山口県まで飛ばした。この有名な野外展なるものを見るのは初めてだったが、美術館では普通展示できないスケールとタイプの彫刻が多数展示されていて、ゆったりと楽しむ気分浸れた。2001年9月のこと、帰路宿泊先の尾道でアメリカ同時テロの映像を見た。

最近芸大の芸術資料館で目にした作品にくぎ付けになった。それは故来野月乙先生の『遠野抄』（1998）という臆顔の作品である。モチーフを含めて全体が青系統の地に白と黒の顔料が混入したように彩色されている。馬とその手前に重な

るような少女の後ろ姿には断続的に白い縞模様が入っている。なぜか馬の頭部から首にかけてとそのすぐ下に伸ばした少女の手と腕も赤く染まっている。はっと思い当たった。これは血だ！

この収蔵品展の少し前、昨年9月の初旬にわたしは数日間東北に遊び遠野市を訪れた。旅行の前から昔読んだ柳田国男の『遠野物語』を再読しはじめオシラサマ伝説なるものを改めて知った。昔あるところに貧しい百姓の父と美しい娘がいた。娘は白い飼馬が大好きで、厩舎で過ごす時間が多くなるうちについには馬と夫婦になる。そのことを怒って父は娘の知らないうちに馬を桑の木につるして殺してしまう。馬の首にすがりついて泣く娘を見てさらに怒った父が馬の首を切ると、娘が馬にまたがり馬共々昇天したという。悲しむ父に娘が夢の中に現れ、馬のかたちをした虫を使う養蚕の仕方を教え、父は立派な繭を作るようになった。かくしてオシラサマが養蚕の神と祭られるようになった経緯は『遠野物語拾遺』が伝える。

来野先生の『遠野抄』は以前にも見た覚えはあったが、オシラサマ伝説が実際に息づいていることを遠野で知ったあとだけに受けた感動は深かった。

毎年2月に開催される学生の作品展も楽しみであった。英語の授業ではあまり元気がないのに、このときばかりはありったけの精力を注いで制作に取り組んだ意気込みが感じられた。若者らしい自由闊達な発想や見事な出来映えに感嘆することしきりであった。わたしが芸大生を一番誇らしく思えたときである。

洒落好きのわたしは授業でも機会あるごとに飛ばしてきた。学生にも洒落一つで5点やると言ったが、言うのはこちらばかりだ。ただある日授業終了後に女子学生がやってきて、肉じゃがとミック・ジャガーと似ています、と言った。それを発表のときに何とか盛り込んでくれないかな、とこっちは無理な注文をつけた。こりゃ頂きとわたしは「肉じゃがやミック・ジャガーの口に合い」と七五調に詠んだ。

七五調と言えば入試歌集というものも芸大に来なければ生まれなかったものだ。これは1990年から始めてほぼ毎年続けてきた。2003年にはひとまず本にまとめた。実技試験を軸に準備段階から合格発表に至るまで入試に関する一切合切がネタ。本部の手順ミスや個人の失態も餌食になった。調子に乗って、入試とは無関係の宇多田ヒカル、松嶋菜々子、ブッシュ元大統領、ディカプリオ、荒川静香、藤原紀香、小野小町まで詠み込んだ。こうしてダジャレ満載、本歌取り、川柳、狂歌ごちゃ混ぜの戯れ歌を作りまくったその筆名は与謝^よ糠^{さぬか}也。これこれ、もうそろそろ止さぬかや、紙幅もつきたぞ。



美大のこと、芸大のこと、 自分と作品のこと

染織研究室 教授 内 藤 英 治

美術系に進もうと考えた時、初めて美大の存在を知り、男は浪人するのが当たり前と知り合いから聞かされ、そういうもんだと変に納得しての受験が美大との始まりです。

友人のお兄さんが、染織専攻の学生さんでしたので御家へ伺いました時、染める為の草稿を描きながら、楽しそうに話して頂き、自分もあんな事をしたい、あんな風になりたいと、染織への憧れを持ち、また高校の友人の御家に遊びに行った時、山をモチーフにした大胆な構図で白地に黒一色で染めた作品が置いてあり、すごい迫力だなーと、すごいお兄さんだなーと感心して見せてもらっていました。そのお兄さんも染織の学生さんだと聞いて、染織はいいなーと再び思ったのが、今に続く始まりです。

その後、めでたく東山七条の美術大学に辿り着き、これで染織が出来るぞーとの思いを持ちました。当時、染織専攻の先生方は、佐野猛夫先生、三浦景生先生、来野月乙先生、八木敏先生、中野光雄先生、中村彦之先生、非常勤にも、そうそうたる先生方が居られ、その元で基礎から楽しくじっくりと、よく学び、よく遊びの毎日でした。特に型染工程での型を彫り進む中で、自分が型を彫っているのですが、何か見えない力で彫らされている様な感覚が下りてきたり、また染色した後の水洗では、水の中で、防染糊が流れ落ちた布に、くっきりとした色彩が染着いており、その不思議さ、美しさに染めたのだとの実感を強く感じていました。



「遊龍の松」2003年、174cm×1,024cm

その上、学科や他専攻にも存在感のある先生方が多数、学内を行き来しておられ、その先生方と学内外でお話する事が出来るという、怖いもの知らずの恵まれた環境でした。先輩方からそれぞれ得意の技法を伝授していただいたり、夕方になると毎日の様に数人で四条河原町辺りの喫茶店で、結構真剣に話し込んだりの日常であった様な気がします。

そして3回生の時、芸術大学に校名変更となりました。丁度この3・4回生の頃から染織の世界には、ファイバーアートの風が一世を風靡し、ファイバーをしない者は、とり残されるとの危機感さえ持ったものです。私も4回生の時ファイバーらしき作品を作りましたが、どうも自分の仕事とは違うと思い、専攻科では、型染作品を一个月に一点のペースで作っていました。

専攻科を修了後、短期大学の教員となり、そこに居られた同僚の先生から、藍を建てないかと誘われ、興味津々の藍建てと藍染めに出会い、その面白さ、藍の色、藍濃淡の美しさに入り込み、これが又今に続く始まりです。

藍色を生かすには、「水、波」をモチーフにしようと思ひ込み、型紙との出会いの中でどんなことが出来るかを表現の要に置き、写生に行っては畳二畳大の「波」、「波紋」の作品を染め続け、数年間で53点をせっせと作っていました。この間何度かの受賞で励まされ、順調な滑り出しでしたが、写生に行けば、これは前に見たとの思いが強まり、なかなか新たな創作に結び付ける事が難しくなってきました。そこで、今迄写生をしながら作品化してこなかったモチーフでの制作にシフトしていき、田圃、鳥、池、大樹、山等々の藍型染作品として、今日に至ります。

勤め始めた私学（途中で京都の私学へ移籍）も、当初はのんびりしたもので、芸大をそのまま持ち込んだ様な教育研究環境でしたが、徐々に私学同士の競争と同時に、大学設置基準の大綱化を受け、更なる独自性が求められる様になってきました。



この頃から本格的に教務も担当する事となり、教育の質の向上に向けての取り組みを計りつつ、一方で自分の制作も疎かにしない姿勢で臨んでいました。

1995年から、京都芸大の非常勤講師となり、ここ洛西の校舎に、昔自分が学生であった頃の匂いを思い出し、楽しさと同時に更なる忙しさが押し寄せてきていました。2001年からは専任となり、改めて芸大の一員として、教育研究に力を注ぐ事に専念出来る様になりました。芸大では、教育と研究の両輪をきっちりと守りながら、教員の研究成果を授業に反映させ、もって学生への教育効果を高め鼓舞していく重要性を共通認識として、研究時間の一定の了解がありました。また少人数での教育環境は、学生一人一人と向き合い、対話する中で将来に向かって育っていく道筋を、共に見つけていく「教育」の「育」に重点を置いた教育本来のあり方を貫く大学として、やりがいと楽しさが同居する芸大でした。一方で、私が学生時代の先生方の様に、若々しい創作力と魅力、存在感を、今の学生達にどれ程示せたかについては、特に学生部長に就いてからは、学生との対話の時間が限定され、十分なコミュニケーションが取りづらかった事もありましたが、出来るだけ話をする様に心掛けていました。しかし、私としても果たすべき役割は、不十分であったろうと感じていました。先にも述べましたが、それほどに先生方は大きな存在でしたし、芸大の先生は、そうでなくてはならないとの思いで歩んできた様な気がします。

学生の頃から今日まで通算で23年間に亘り、京都市立美術大学、京都市立芸術大学で育てて頂き、大変お世話になってきました。特に染織研究室の先生方には、大変お世話になりました。共に厚くお礼申し上げます。

今後も少しずつですが、着実に頑張っていきたいと思っております。

芸大もこの4月から法人化を迎え、新たな出発です。これを機に教育研究の更なる成果をもって京都、日本更には世界の文化の醸成と発信、発展を願っております。

ありがとうございました。



「水鏡」 1980年、180cm×174cm



「浄妙坊と一來法師」 2011年、174cm×344cm



ラビリンスの愉悅

構想設計・メディアアート教授 中 井 恒 夫

燃え上がるオレンジ色の炎に包まれた「サクリファイス」のラストシーンを最近まで観ることがなかった。このタルコフスキーの最後の作品と偶然に遭遇したのは3・11の数日前であった。激しく燃える炎に自らの生を捧げることで、声を失って生まれた子供に、枯れた樹に水をやり続ける使命と引換に声を与え、樹が水を吸い上げて蘇ることを託すメッセージで終わっている。彷徨っている私にとって、遅れてきた「サクリファイス」は最適な出会いと言えるものになった。タルコフスキーとの最初は「僕の村は戦場だった」で、確か20才頃のように思えるのだが積極的に見た記憶がなく、さほど興味がなかったのである。映像の文体はゆるくただ長回しになっているようで、その焦点を曖昧にする映像言語は眠気がしてしまうものだった。すでに私はフェリーニの「8 ½」の奔放なシーンの構成に目を奪われて、映像の魔術的な魅力にのめり込んでいた。ル・クレジオの「調書」にもシーンの断片と記述が混在する読む意志を誘うドラマがあり、寺山修司による演劇の冒険には人間の露出した欲望の断片や膨張された説話や物語のラビリンスがあり、これらから表現の楽しさを感じていたのである。この頃に触発されたものから表現したものがフィルム作品「仮眠の皮膚」だった。メディアインスタレーションの「ilinx」を



ilinx

まとめあげて表現しようとした内容から離れながら、19才の時に作り始めたこの16mmフィルムの処女作品と基本的な構成が相似している事に気付く事になった。随分と遠くまで歩いて来たようで同じところまで戻っているのかも知れない。時代を超えたセルフポートレートにもなっている。この「ilinx」は続編として成り立っている。それは啓示のように目の前に浮かんだシーンに急がされてキノコ雲が現れる映像を提示することになった2009年の「東京原爆」であり、対をなすメディアによるプレゼンスである。これは人が人として根源的な部分で対峙する事を強いながら答えが出ない閉鎖的な関係で終わっている。負の遺産として組成した原爆で放置した解決を、風に吹かれて灰が宙に舞い上がる「ilinx」に向けてさぐっていたのだが、この時間ホログラムの中で予期せぬプロメテウスの蹂躪をまたしても我々は受けることになってしまった。この2作品は時間を超えることで対により生成し、それぞれを逆照射することで人間の有り様を垣間みる仕掛けになっている。判りやすいようで曖昧さをクッションにした根源的なアイコンの組み合わせによるインタラクティブインターフェイスに、人の中を流れる赤い血の色を確認することができるだろうか。私はまたしても完成の確認ができないまま「ilinx」から離れて遠退き、タルコフスキーが人生を完結させた「サクリファイス」の枯れた樹に流れる水の想像力から、その重い意味をようやく享受できたと錯覚している。私はまだ暫く答えを見つけようとはしないで、表現することを十分に完成させる気もなく、未完のままこの混沌とした迷宮の中を彷徨ってみたいと思っている。

ルネサンス-京都・映像・メディアアート 座談会「映像・メディアアートの使徒へ告ぐ」より



東京原爆／2009



ilinx



ilinx



山に臨む部屋から

芸術科学系列・保存修復専攻 高 林 弘 実

この拙文を書くにあたり、前号の『象』31号に掲載されている前任の秋山哲郎先生の“「京都芸大」教員生活を終えるにあたって”を拝読していたところ、私の着任について誇大な告知をしてくださっていたことを発見して仰天した。

私はこの3月に退職いたします。この後4月より着任されます、高林弘実先生は、先に述べました東京藝術大学大学院の文化財保存専攻「保存科学」研究領域を修められた後、保存科学・保存修復に関する数々の業績を挙げてこられた方です。今後の京都芸大そして保存修復専攻に大いに貢献されるのは間違いありません。(一部改変)

あまりに恐れ多いので、この場をおかりしてきちんと自己紹介をしようと思う。私は大学では理学部で化学を専攻した。身の回りの多様な現象が少数の基本的な概念で統一的に理解されることに惹かれたからだ。しかし、大学院に進学した頃に、遅ればせながら文化や風土といったものにも興味を覚え、これらと化学の接点を苦肉の策として保存科学に見出し、東京藝大の文化財保存学専攻に入学した。東京藝大では顔料の変色に関する化学実験をしていた。おそらく多くの日本人が古色づいたものに趣を感じるのと同じような感覚で、私は「劣化」という現象に興味がある。人が創ったものが朽ちていくさま、そして最終的にどのように自然に還っていくのか追うことは、人が何ものであるのかを知るためのアプローチとも感じている。修了後に就いた前職では、中国の敦煌にある仏教寺院遺跡「莫高窟」で壁画の材料・技法に関する理化学分析調査をしていた。年に2ヶ月ほど現地に滞在して、第285窟という石窟の中で一日を過ごしていた。実験室の住人が素人同然で文化財の調査を始めたのだが、のべ半年も同じ壁画の前にいると、壁画が制作された当時について想像する余裕も生まれてきた。私には「保存修復」に関する直接的な実績はない。学生時代の拙い実験は「保存科学」といえなくもないが、前職における仕事は「保存科学」というよりは「文化財科学」といった方がよからう。

「保存修復」が対象とする文化財は、過去に形づくられた遺物ではあるが、そこに文化的な価値を見出して「文化財」とするのは後世の人間である。すなわち、文化財とは我々が創造するものだ。そして、人がどんなに努力をしても自然の摂

理に従って少なからず劣化していく。すべてを保存できない以上、保存修復には「なにを保存すべきなのか？」といった文化財の価値への問いがついてまわる。京都芸大には、模写制作を通して丁寧に絵画作品と向き合う伝統がある。そして、保存修復専攻では実技・芸術学・保存科学が融合する体制ができつつある。「保存修復」を狭義に修復作業そのものとは捉えず、過去の作品から文化的な価値を見出す過程も含めた包括的なものと捉えたとき、京都芸大における保存修復専攻の進むべき方向が見え、私にも微力ながら秋山先生の期待に応えられる場面が出てくるように思う。2012年4月には、新しい実技の先生も着任される予定である。今後の保存修復専攻がどのように展開していくのか、当事者ながら楽しみである。末永く、よろしくお願い申し上げます。



SILENT@KCUA (サイレント・アクア) 開催について

サイレント・アクア実行委員、美術研究科長 鶴 田 憲 次

最初に、平成23年3月11日の東日本大震災で被害を受けられました多くの方々に心より哀悼とお見舞いを申し上げます。

未曾有の大震災の後、我々芸大の教員の中からも、何か出来ることはないかとのあせりに似たような感情が渦巻いていました。法人化に向けた会議のなかで、何処からとも無くチャリティーオークションが出来たら芸大らしい貢献が出来て良いのにとの話題になりました。

学長から具体案の作成を依頼された私は、実を言うと上手くいかないのではないかとの不安で一杯でした。前年度の130周年記念事業協賛のための同窓会主催でのアートフェア実施は同窓生の皆様の献身的なご努力で成功し、多額の協賛金を芸大に頂きましたことは真にありがたかった事でしたが、同時に芸大の130周年なのに現役教員の出品が少ないと、お叱りのお言葉も頂戴していたからです。従来のチャリティーオークションの方法でしたら、額縁など出品していただく方の負担も大きく、まして二年連続となればどのくらい出品していただけるのか不安だったからです。

そんな折、建畠学長と若手の教員との懇談の席で油画のサイモン先生（Simon Fitzgerald教授）から、ロンドンのRCA（Royal College of Art）で実施されている『Secret』と言うチャリティー事業が紹介されました。内容は、作者名は伏せて（裏に署名をする）誰の作品か分からないようにして、大きさもハガキ大のサイズとし、学生の作品と一緒に、オノ・ヨーコとかデミアン・ハーストなどの超

有名なアーティストの作品も混じっており、定額で一人4点まで買えるというものです。何日も前から行列が出来るほどの人気になっているとの事でした。その場にいた若手教員からもその方式なら出品したいとの声が上がったようです。

この話を学長から聞いた私は、今回のチャリティーオークションの方式はこれし



が無いと思いました。これなら多くの現役教員の参加が見込める事、学生も参加できること、卒業生も額縁の負担も無く出品しやすいと思いました。これを参考にオークションの実施案を練る事としました。

実施案作成

何をするにもお金が要ります。芸大にはあらかじめ決められた京都市の予算以外一円も有りません。ここは、同窓会にお願いするしかないと思いました。従来の形式のオークションでの内諾を得ていたものの、急な形式の変更をどう説明したら良いのか、この方式を理解していただけるのか不安でしたが、学内役員小山先生のご努力も有り、中井会長、上村副会長、川村副会長のご理解も得ることが出来、総会でも150万円のオークション実施経費を認めて頂きました。もしこれが無ければ、サイレント・アクアは実施出来ず、幻の計画となっていたでしょう。同窓会の皆様には深く感謝いたします。

さて、会場の確保ですが、ギャラリー・アクアの23年度の事業計画も既に決定していたのですが、7月に1週間だけなら余裕があることがわかり、この期間に決定しました。事業の名称もサイレントオークション方式（事前入札制で競り合わない方式）を取ることからサイレントを採り、ギャラリー・アクアからアクアを採って、『SILENT@KCUA』としました。そのまま読むと、『沈黙の海』とも解釈できて、今回の事業にふさわしい名称だと思い決定しました。これもサイモン先生の発案です。

後は人材の確保です。ギャラリーの学芸員の森山君に加えて、誰かこの事業にかかりっきりで仕事が出来る人を探さなければなりません。幸い油画の大学院修了生で徳山拓一君に引き受けて貰うことが出来ました。彼ならギャラリー・アクアのホームページを作成したぐらいですからWebにも強く適任者です。

実行委員会設置

学長を委員長とし、美術の評議員全員にサイモン先生、徳山君、森山君、廣野事務局長を加えた実行委員会を設置しました。事務局は課長級以上が全面的に協力してくれることになりました。開催まで時間が逼迫した状態でしたので、同窓生全員に照会するのは諦め、現役教員と学生は学内で参加を呼びかけ、著名な卒業生には学長と私から呼びかけることとし、各専攻からも可能な限り卒業生に呼びかけて貰うこととしました。その結果卒業生全員には周知が行き渡らなかったのは、時間が無かったとはいえ、反省材料のひとつです。次回からはお金をかけずにどのように卒業生全員に周知していくか、良い方法を考えたいと思います。

目標1000枚

短期間の募集にも関わらず目標値に近い866点もの作品が寄せられました。卒業生に声をかけて頂きました各専攻の先生方に深く感謝いたします。

WEB入札

ネットからも入札出来るように出来れば良いとの声に対応することとなりました

た。これには専門知識も必要で、素人には出来ません。徳山君にはずいぶんと働いてもらいました。感謝します。

ネットにのせる為には、集まった作品を、Web上に記録しなければなりません。学生ボランティアにも協力してもらい、時間の無い中、何とか全作品をスキャンし記録を正確に残すことが出来ました。

実施

7月5日～10日（6日間）

オープニングには市長も来て頂き、入札も何点か入れて頂きました。さて、何点落札出来たのでしょうか？

Webでの入札も可能とした結果、思わぬ事態が起きました。あまりのアクセスの多さに初日からサーバーがダウンしてしまったのです。藤原先生のお世話になり、何とかアクセスを制限して乗りきろうとしたのですが、またもやその日のうちにダウンしてしまったのです。学長や会場にいた実行委員と相談の結果、最終日にアクセスが集中することを考えると、早い時点でWeb入札は断念した方がダメージ少ないと一旦は決断しました。

2日目の朝、事務局から何とかなるかもしれないとの知らせが有り、京都市の塚本行財政局長のお世話になり、ホームページを管理している会社のサーバーが借りられことになったのです。データの移動に丸一日かかりましたが2日目の夕方には無事全面復旧して事なきを得ました。この件で明らかになったことは大学のサーバーが古くて容量が全く足りなかった事です。普段の何十倍ものアクセスに耐え切れなかったのです。現在の京芸のホームページはリニューアルされサーバーも新しくなっていますので御安心下さい。

入札システム

最低入札価格を3000円に設定したのですが、一つの作品に何人入札しているのか分からず、3000円の人が何十人もあっても困りますので、入札が5票毎に色の違う小さなシールを貼ることとしました。結果シールの貼ってある作品に入札するにはより高額を入れる必要があることや、シールの貼ってない作品の入札を促す事となりました。

落札者への連絡・発送

この作業が思った以上に大変な作業であったと思います。作品点数が多いことと、必ずしもすぐに連絡が付く方ばかりではなく、又けっして間違いがあってはならず、大変気を使う作業になり、課長級以上の職員の方々に対応していただきました。落札者の方から大変丁寧な応対であったとの声を聞いています。事務局に感謝します。有難うございました。

実施結果

来場者数	1,109名（アクアの一週間の入場者記録更新）
入札数	2,279件（Webを含む）

落札作品数	663点（出品点数866点中）
落札総額	5,748,365円

全額を京都芸大と美術学部同窓会との連名で京都新聞社会福祉事業団を通じて被災地に寄付しました。

最初は同窓会から頂いた150万円に達しなかったらどうしようかとの心配もありましたが、作品を通じて多くの人に喜んでもらった結果、同じ額が寄付出来れば、芸大らしい貢献になるとの信念で事業を行いました。予想を遥かに超える落札金額を得ることが出来、同窓会からの協力金を遥かに上回る金額を寄付出来、作品を通じて多くの人に喜んでもらえたのは芸大として大きな喜びです。

2012年度は今年度と同様の趣旨で第二回目の**SILENT@KCUA**を計画しています。9月12日（水）～9月30日（日）を予定していますのでふるっての出品・参加をお願いします。作品集荷は7月末（予定）です。詳しくはギャラリー・アクアまでお尋ね下さい。ありがとうございました。

『生きるための手遊びを探る』

～宮城県で学生達と手遊びカフェを開催～

工芸科染織専攻 准教授 日下部雅生

■2011年3月11日

その日、被災地以外の多くの方々がそうであったように、私もテレビの前で呆然としていた。現地の知人は大丈夫なのか、被害は何処まで広がっているのか、これから世の中がどうなっていくのか…。しかし、そんな不安な状況下ながら、積極的に近所の方や友人たちと直接集まって話しをしたり、仕事や家事、食事、あるいは備えを一緒にすることで、不安な状況を共有し緩和するようなコミュニティ内での行動はとれなかった。



その後、原発事故を含め情報はいよいよ錯綜し、被災していない我々にリアルなものは何もなかった。ふと思った。都市部においてコミュニティが崩壊していると言われて久しい今日、ネットや携帯端末は確かに普及しているが、災害でそれらがダウンしたとき、我々は如何に精神の平衡を保ち生きていくのであろうか？

また東北のまだ比較的コミュニティがしっかりしていたであろう被災地で、生活基盤が崩壊した現在、人々はどうやって地域社会を、日常を、人間性を回復していくのだろうか？ それは果たして可能なのだろうか？

またその回復に対して、我々はどのようなお手伝い出来るのだろうか…

■成果物でなく行為が目的の工芸

「我々も何かしなければ…」数日後、大学で親しい先生方と話す中で、「瓦礫の撤去など労働力としてのお手伝いもすぐにはあるだろうが、今から準備を始め、然るべきタイミングで我々が得意とする芸術の分野で貢献をしていこう」と方向性を出した。最近言われるようになった「プロボノ」である。

我々の専門で、というところですがすぐに思い当たったのが、自身が6年前から行っている“作り上げる作品や製品ではなく、行為そのものが目的の工芸”の研究である。

工芸美術といわれる芸術分野でも、伝統工芸を含む産業分野でも、出来上がる作品や製品が目的である。しかし、制作する行為それ自体も工芸の目的に成り得るのではないかという考え方である。まさに“工芸する心”の問題である。

この考えに至ったきっかけは、アートと少し状況が違う工芸の世界で、工芸家自身がマネジメントを行う“クラフトマネジメント”を提唱する研究の取材であった。沖縄で紅型工房を経営している教え子達から「商品は売れないのに、工房に勤めたいという人が引きも切らずやって来て困っている・・・」と聞いた事に始まる。もちろんほとんどの入門希望者は長続きしない。本当の意味で、厳しい工房の中で生産に覚悟があった訳ではなかったのだ。ではその人たちが求めているものは何か？ それは“沖縄で工芸する自分”のイメージに他ならない。もちろんこのような現象は、カルチャーや体験教室で見られることではあるが、より確信的に行為することに重点をおいて考えてみたいのである。

人は心や時間、経済に余裕のある時、あるいは強い想いがある時に、生活を彩ったり手遊びを行ったりする。同時に悲しい時、辛い時、やり切れない時にも手を動かして気を紛らわせるのもまた事実である。手遊び、あるいは手慰みとは手でする慰み。退屈を紛らわすためにする手先の仕事。暇つぶし、気晴らしなどの目的で行われる他愛もないことの総称…。手遊びする事で気持ちは和らぎ、手遊びする事でその場に長く居続ける理由が出来る。今回は工芸的な手遊びを通して、被災地の方々の気持ちを紛らわせてもらおうと考えたのである。手芸や軽作業の手遊びをしながら情報交換や気分転換をする事で、少しでも気分を和らげ、ストレスが発散出来るきっかけを創出するのが目的である。

■活動の計画

共同研究者に陶磁器専攻の長谷川直人教授、彫刻専攻の小山田徹准教授、漆工専攻の安井友幸准教授を迎え、いよいよ準備が始まった。

彫刻専攻の小山田先生は阪神大震災の当時から、非常時におけるコミュニティスペースの研究をされており、手遊びしながら何時間でもくつろげる“カフェ”の構想は小山田先生との相談の中から固まっていた。被災地に出来た新しいコミュニティの中に手遊びをする空間——人々が集まり、時を過ごし、手を動かし、口も動かして何となく憂さを晴らす、井戸端と共同作業所とおしゃれなカフェを合わせたような場所——を作ろうというのである。

小山田先生の幅広いネットワークと、今回開催する“カフェ”部分の製作・運営のノウハウには、大きく頼るところとなる。そして陶磁器専攻の長谷川先生、漆工専攻の安井先生のご協力を得て、工芸科を挙げたものとしてこの手遊びに取

り組むことが可能になった。もちろん大勢の学生に参加してもらうことも大前提である。小山田先生がご担当のテーマ演習「緊急災害時の共有空間の創造について」の学生達も今取り組みに参加してくれることとなった。

計画を詰めていく中で、いくつかのポイントを確認した。

◎まずは地元の方のお話しをとことん聞かせて頂くこと…それだけで被災者の気持ちは楽になり、我々にも得るものがあるはず。

◎ワークショップではなく、あくまでも手遊びであること…この催しは頑張って参加してもらうものではない。

◎何かをしてあげるのではなく、こちらが勉強させて頂くスタンスを堅持する…手遊び・手わざにおいて我々は、被災者の方々から学ばせて頂く立場である。

◎少しでも地元の手わざ、伝統の産業に触れてみる…手遊びに繋がる何かを現地で感じることに。

◎何もないところにテントを設営し、キャンプ生活をする事で、生きる営みを再構築する疑似体験をする…生活を構築しながら活動する経験を学生たちと共有すること。

等々…

■活動の下準備

6月末から7月、まずは教員で現地の視察を行った。場所は宮城県大崎市（旧古川市）と女川町、白石市など。この視察で活動の全体像が固まった。

被災地の状況が把握出来ないため、宿泊や食事、給油など現地のお邪魔にならないように、安井先生の私有キャンピングカーにすべてを積み込んで出かけたのである。

穂波の郷クリニックは在宅ホスピスケアの取り組みと、総檜木造りのクリニックで外来患者や介護する人、される人すべてが交流できる素晴らしい施設。ここを支えているのは沢山のボランティアスタッフ、夫や妻をここで看取った方が多くいらっしゃる。一般的に病院と患者家族との付き合いは、患者が回復するか亡くなると終わるものだが、満足できた介護の経験が、残された患者の家族までもこのクリニックに居続けさせるのであろう。クリニックの中庭がカフェ開催地の一つとなるのだが、クリニックのスタッフが、地元中学校で行う特別授業「いのちの授業」のお手伝いもすることとなった。

そして壊滅した女川の町。テレビで何度も観た町立病院。自らの浮力で横転した建物…。

この視察の最終日、もう一つのカフェ開催地、女川第1小学校前の仮設住宅を

見学させて頂いた時、子育てに大変なある奥さんから、「これから暑くなるので出入口（玄関とは呼べる代物ではないので…）を開けておきたいけど、狭い室内に山積みの家財道具が見苦しいから、暖簾か何かあれば嬉しい…」とのつぶやきを聞く。

暖簾なら工芸の領分、早速調達をと思ったが、もう一つの印象的な風景があった。それは仮設住宅の集会所に残されたさまざまな支援物資である。必要な物資は日々変化する。遅きに失したものの、早すぎるもの。そして仮設住宅すべての世帯に分配できる数がそろっているのを待っているもの。支援は平等が最優先の問題であるそうだ。

夏はすぐそこ、でも1世帯だけに贈っても目立つ暖簾は使えない。すぐに全世帯数60枚近い数の暖簾が用意できるのか？

帰京後すぐに相談に向かったのは㈱田中直染料店さん。快く提供して頂いた60枚の暖簾と、それを1日で染めた学生達の頑張りは、京都新聞にも紹介されたのでここでは割愛させて頂くが、必要な暖簾をすぐにお送り出来たことは、手遊びカフェの開催へ幸先よいスタートであったと思う。



染織棟にて60枚の暖簾を学生たちと染色する



現地女川の
仮設住宅を飾る



京都新聞 7月29日



産経新聞 8月17日

■活動の準備

活動内容と日程が固まったのは、大学が夏期休業に入る寸前。学生たちも夏休みの様々な計画が既にあったかとも思うが、早速参加者を募集、具体的な活動の準備が始まった。

現地へ行く17名の学生以外に、当日はどうしても都合がつかないので、準備だけでも手伝いたいと言ってくれる学生も多数集まってくれた。

現地での活動はカフェ用什器と手遊び用道具類の持込み、それらを使った“手遊びカフェ”の開催。我々が帰った後も手遊びカフェがコミュニティ・カフェとして存続するように、手遊びの道具類はもちろん、準備したテーブル、ベンチやパラソル、カフェの食器などはすべて、それぞれの開催地に寄付することになる。その什器類は少しでもぬくもりや愛着を感じて頂けるよう手作り。夏期休業中、教員と学生が共に汗みずくになってテーブルや椅子を製作する。カフェでサーブする保存や手作りにこだわった食材も、学生が中心になって準備した。また陶磁器専攻の学生が自作のテーブルウェアを持ち込むなど、徐々に活動の実感が伴ってくる。

手遊びの準備として各専攻の専門を生かすことは基本であるが、洋裁学院を主宰し、今回の震災にあたっていち早く、様々な針・糸・布を通した活動を始めておられる柴田美穂子氏にご指導頂き、参加学生がこぎん刺しの技術を新たに習得したり、カフェ用に型染やステンシルの型紙を制作したりとソフト部分の準備も行った。

今回の活動、経費の個人負担は元より覚悟の上であったが、学生たちの大学での活動に対する保険適用を受け、ボランティア休暇などの規定がない本学で我々教員の保険や身分の保障を確保するために、平成23年度京都市立芸術大学特別研究助成費を申請した。

必要経費の一部に充当することが出来て助かったが、反面このような活動への運用手続きが手探りで本当に大変であった。事務職員の方のご協力も頂きながら、限られた予算内で学生が乗るバスの手配や宿泊地の選定とその経費の申請、現地での活動の段取りや重たく嵩張る什器運搬の算段など、出発の直前まで様々な事務的調整作業に忙殺された。

正直、京都を出発した時には、仕事の大半は成しえたような思いさえしたものである。



什器類の製作

■本番、穂波の郷クリニックでの活動

いよいよ東北に出発した総勢22名。9月14日に京都を出発、翌15日に東松島市のキャンプ場に到着した。まずは穂波の郷クリニックでの活動である。

16日午前中、搬入した什器を組み立て、クリニックの庭にカフェを設置する。準備ができたところで、一旦学生たちと近隣の色麻中学校に移動し、クリニックの先生、コーディネーターの方々による特別授業「命を輝かそう〜共に」のお手伝い。薬にも専門家にも頼らない、生きる力の回復について考える授業である。中学生たちの元気にホッとさせられながら、学生たちと僅か1校時に詰め込まれたプログラムを必死でこなす。



午後、クリニックに戻っていよいよ手遊びカフェを開店。この日、仙台で19代目になるという「御銅師」^{おんあかがねし}田中善氏が、手遊びカフェに銅細工のメニューを加えて下さった。津波で流された瓦礫の中から、自分が打ち出した鍋や薬缶が凹まずに拾い出されて、叩く事で作られる形の強さを実感し、自分の仕事を再確認しましたとの田中氏のお話が、深く印象に残っている。

カフェには本当にたくさんの方が来て下さった。“なるべく長くいてもらう”コンセプト通り、暗くなってもいよいよ手遊びカフェは盛り上がり、中には6時間も過ごして下さった方も！

私が印象深かったのは、ご自身が栽培された藍で染め、ご自身で縫製された上下揃い（エプロンまで！）のお洋服で来られたKさん。しかもエプロンにはお孫さんの古い歯ブラシに漂白剤をつけて描き抜かれた蜻蛉が飛んでいて、何ともさりげないところが凄い！

胸には亡くなったご主人のネクタイピンを使ったブローチでワンポイントのアクセント。驚いたのは絞りのシャツだけは、よく洗うものなので色落ちしにくい化学染料が使われたとのこと、…完璧である。



Kさんはご主人をこのクリニックのお世話で看取られた後、ご主人が残されたYシャツやタイピンなどをリフォームして、お二人の思い出を身に着ける事で楽しんでおられるとのこと。庭先に咲く花や芽吹く新芽、座敷に迷い込む蝶などにご主人からのメッセージが感じられる時もあるそうで、お二人の深い愛情が、ご主人が亡くなられた後にも消えることなく続いているようである。

クリニックを知り尽くしたKさんに、学生たちがカフェの横の庭を案内して頂く。ここには宮城県に生えている様々な木々が植えられ、小さな池にクワイも生えている。Kさん、クワイの塊茎を知らない学生に見せて下さろうと水底を探って下さるのだが、なぜかタニシばかりが転がり出て学生たちには大うけであった。



田中善氏の銅細工コーナー



出来上がった銅の薔薇



手遊びカフェの“カフェ”を支える喫茶屋台



柴田美穂子氏ご指導の
こぎん刺しのテーブル

■女川第1小学校前仮設住宅での活動

現地三日目の9月17日は、女川第1小学校前仮設住宅での手遊びカフェ開催である。

当初カフェの開催場所に予定していた仮設住宅の集会所は、嬉しい誤算で既に共同作業所として活用が始まっていた。そこでクリニックと同様に屋外でパラソルを広げ、テーブルを並べた。場所が確保できたので、手遊びのメニューはフルラインナップである。

ここでもさまざまな出会いがあった。この場に今まで知り合うことの無かった女川の方々と、京都から来た私達。そして我々同様に、様々な活動や視察のために女川を訪れた人々が出会っていく。震災は不幸な出来事であったが、このような新しい出会いは素晴らしいことであると思う。

喫茶、銅細工以外の手遊びカフェのメニューは以下の通りである。

◎染織体験 ～ステンシル・捺染

7月にお贈りした学生の手染め暖簾。とにかく大急ぎでお送りした暖簾に、それぞれ使って下さっている方のイニシャルや、ワンポイントを入れる事から、その場で持ち込まれたTシャツやハンカチへの染色も出来るのではと企画した。

濃い地色、薄い生地になど様々な状況に対処出来るよう、今回もまた(株)田中直染料店さんにご協力を頂きながら準備を行っている。



Tシャツや手拭へのワンポイント入れる手遊び

◎手芸体験 ～こぎん刺しのくるみぼたん・ティッシュケース・コースター

柴田美穂子さんにご指導頂いた“こぎん刺し”で、クリニックでは柴田さんと共に、そして本日は学生たちだけで、くるみボタンやティッシュケースを作るコーナーを開いた。

最初は来られた方に刺し方をお教えするのだが、方法を理解されるとやはり年上の女性にはかなわない。これなら大丈夫と楽しげに手際よく、凝った模様を刺していられる小母さん、お婆さん方に「参りました！」と学生たち。



こぎん刺し、いつの間にか教えられて…



◎漆・加飾体験

漆工の安井先生がまず取り組んだのは、下準備で訪れた女川町の瓦礫の中から拾い上げた器の金接ぎ。震災でいくつにも割れてしまった器を接ぐ作業は、復興に象徴的であった。

割れた器を拾った場所を手がかりに、「もしもし、君の家にこんな模様の器なかったか？」現地の方が心当たりの方に電話して、その器の持ち主を探して下さるような展開に、カフェは盛り上がった。

また型紙を利用しての加飾体験も、塗の器を持ち帰れることもあり人気を呼んでいた。

◎万相談

男子学生が中心に、修理、リフォーム、何でも受付のDIYコーナー。不便な仮設住宅の生活で、道具があれば修理したい、付け加えたい、形を変えたい等々、いろんな想いがあるのでは？と持ち込んだ電動工具や大工道具、材木の数々…。

実際プレハブの金属製の壁に手作業では難しい棚の取り付けや、早くも隙間が開き始めた建物自体の修理など、暗くなるまでフル回転、学生達は手遊びを遥かに超えるような大仕事も熟していた。



■被災地視察と工房見学

学生たちの被災地視察、9月18日にはまず石巻市を視察させて頂いた。石ノ森萬画館のある中瀬地区は、歴史的建造物のハリストス正教会教会堂の建物が残っている。

津波の方向に膨れ上がるように破壊された教会の壁、中州の遊歩道の金属製の手すりがすべて折れ曲がっていたり…。7月に下見した時よりかなり片付けられてはいるが、初めて見る者にはまだまだ衝撃の状況である。

そして昨日は忙しくて回れなかった、女川町の壊滅した中心部に足を踏み入れる。

日頃元気な学生達が言葉を失くした時間であった。



■最終日、雨が降り始めるが・・・

最終日は東松島市で5日間を過ごしたキャンプの撤収。この日台風15号の影響で朝から雨が降り出した。ここまで好天に恵まれたので、「買いそろえた羽羽が漸く役に立ったね。」などと笑いながら、それでも雨の中、20名以上が5日も過ごしたキャンプの撤収は大変である。今回の学生たちの取り組みの一つである“生活を再構築すること”は、最終日によりやく少しだけリアリティを持ったのであった。

撤収を終えバスに乗り込み、最後に東北の手わざを見学。見学にはいくつかの候補を挙げたが、雄勝石は施設が被災・閉鎖状態であったり、仙台市の御銅師、田中善氏の工房には、前日慢性的な災害渋滞のため予定通り辿り着けなかったりで、最終日に訪れる事が出来たのは白石市の白石紙工房であった。

まずお話をして下さったのは、戦前に当時衰退していた白石和紙を復興された、今は亡き遠藤忠雄氏の奥様で現在工房を主宰されている遠藤まし子さん。耐久性と耐火性をもって、東大寺のお水取りの衣に使われる和紙を毎年背中に背負い、奈良まで納めに行かれるお話や、昭和18年に宮内省に極秘に納入した和紙が、2年後に戦艦ミズーリでの無条件降伏の調印文書に使われたお話、紙布を織るための紙の糸を、漉いた1枚の紙をどう折って切っていくかなど、様々なお話は尽きない。またイッセイミヤケ氏が世界的な注目を集めた紙を使った衣装を、実際に

学生が着させて頂いたり、しばし震災の事を忘れる興味深い時間を過ごさせて頂いた。

このような特別な和紙が、地元のおばあさんたちのみに支えられている現状。「私はこれしか出来ないし、出来ることをやって来ただけ。でもこんな大変な仕事だから、跡を継ぐ若い人はいないよ。」とのお言葉に、様々なお話しに目を輝かせていた学生達もしんみり。紙布も織られるこの素晴らしく強い和紙は、かなり有名なのでご存知の方は多いと思うが、その伝承は心配な限りである。

お話を伺った後は工房の見学。

工房の方が「地震の時は、ほんとおっかなかったよ～」と言いながら、「道具という道具が全部落ちてきたんだよ、それでね…」と、紙漉きの道具類を掛ける無数のフックのすべてに上向きの返しをつけて、さっそく改良されたものを見せて下さった。工房の道具類すべてに独自の工夫を施し、合理的に使いやすく改良していた遠藤忠雄氏の精神が今もなお、生き続けているように感じた。



■終わりに

手を動かして気を紛らわせて頂こうという今回の取り組み、実際に現地で活動して感じたのは、心の復興はそれぞれの方の被災の状況や置かれた立場、個々の性格によって様々だということである。年齢差やジェンダーの問題も浮き彫りになった。カフェはともかく、手遊びにおいては圧倒的に子供や女性の参加が多かった（もちろん、働き盛りの男達は復興作業に出ているという状況もあるが・・・）。

また、今あるものを装うのではなく、まだ無いものの充足に要望が多く、その点、越前の漆器屋さんからご提供頂いた弁当箱や椀など、さまざまな塗りの器は、加飾の体験と相まって大人気であったし、“よろず相談”では手遊びを大きく外れ、仮設住宅への数々の作業に大童であった。

震災から半年が経ち、満を持して実行した手遊びカフェであったが、まだまだ成功という状態でなく、継続して取り組んでいく必要性を感じた。カフェ開催地の方々から、「次はいつ頃やりましょうか？」と言って頂いた時は、何とも嬉しくほっとした瞬間であった。

いずれにしても“何かをしてあげるのではなく、こちらがいろいろ勉強させて

頂く”ことを基本とした今回の東北手遊びカフェキャラバン、学生達のレポートを読む限り、彼らには本当に勉強になったと思っている。

関西でニュースやネットでとらえる震災・被災地だけではないさまざまな面を見、カフェに来て共に手や口を動かして下さった方々から伺う生の声は、優しく、厳しく、時に辛らつに彼らの心を揺さぶったはずである。

私自身も被災地の方々に教えられ、助けられながら行った活動であったことを思うにつれ、被災されてあのような状況下でも尚失われない、東北の人々の懐の深さにあらためて頭が下がる思いである。

末筆ながら、今回の活動にお力添えを頂いた方々に、心より御礼、感謝を申し上げる次第である。

(以上)



■学内消息

(2011年1月～12月)

1月15日～1月16日	2011年度大学入試センター試験
2月4日～2月26日	『三瀬夏之介展 ―だから僕はこの一瞬を永遠のものにしてみせる―』(京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA)
2月5日～2月12日	ひろいのおこ教授、ドイツにて研修
2月9日～2月13日	2010年度卒業・修了作品展(京都市美術館及び本学構内)
2月25日～2月27日	2011年度美術学部実技入学試験
3月5日～3月27日	『ベルギー&日本-当世版画交流展』~Part 1~ ~ひらののはっこうあれじまい~(京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA)
3月5日～3月27日	創立130周年記念「京芸生を育んだ先生の作品展」
3月9日	2011年度美術学部入学試験合格者発表
3月13日～3月14日	2011年度大学院美術研究科博士(後期)課程入学試験
3月17日	2011年度大学院美術研究科博士(後期)課程入学試験合格者発表
3月18日～3月31日	柏木加代子教授、フランスにて研修
3月20日～3月28日	吉田雅子准教授、イタリアにて研修
3月20日～3月30日	金氏徹平講師、台湾にて研修
3月23日	2010年度卒業式・学位記授与式
3月31日	秋山哲郎教授、退職
4月1日	秋山哲郎氏に名誉教授号を授与
4月1日	高林弘実講師、新任
4月8日	2011年度入学式
4月9日～5月22日	京芸Transmit Program#2 転置 -Displacement- (京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA)
4月13日～4月18日	秋山陽教授、アメリカにて研修
4月16日～4月20日	辰巳明久教授、フランスにて研修
5月19日～5月22日	五芸大体育・文化交歓会(京都市立芸術大学)
5月22日～5月29日	加須屋明子准教授、ポーランドにて研修
4月22日～7月24日	収蔵品展「前期展」(芸術資料館)
6月4日～6月30日	アジア芸術家交流展-京都からの出発 (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)
6月22日	特別授業プロジェクト ジャン=リュック・ヴィルムート氏特別授業 (大学会館交流室)
7月1日	創立記念日
7月5日～7月10日	東日本大震災支援チャリティオークションSILENT @KCUA (京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)
7月8日	特別授業プロジェクト 鎌仲ひとみ氏特別授業(中央棟講義室1)
7月14日～8月7日	2011年度 総合基礎実技展(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)
7月15日～7月20日	池上俊郎教授、中国にて研修
7月26日～9月3日	サマーアートスクール(本学内他)
7月27日	特別授業プロジェクト 隈研吾氏特別授業(中央棟講義室2)
8月7日	美術学部オープンキャンパス(本学内)
8月10日	夏休み子ども写生大会(京都市動物園)
8月11日～8月28日	吉田雅子准教授、スウェーデンにて研修
8月13日～8月21日	Colors of KCUA 2011(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)

- 8月24日～9月10日 『FIRE2011』『ashiato2011』（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）
 8月24日～9月11日 『五ヶ国の芸術大学学生によるイラストレーション展”Fire”』
 『京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品展 ARTであしあと2 版画卒業・修了作品』（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）
- 8月28日～9月14日 井上明彦准教授、ブルキナファソにて研修
 8月31日～9月18日 定金計次教授、インドにて研修
 9月8日～9月20日 宮本道夫教授、中国にて研修
 9月4日～9月6日 潮江宏三教授、大韓民国にて研修
 9月8日～9月14日 西田真人教授・綾田勝義教授、中国にて研修
 9月8日～9月15日 浅野均教授・川嶋渉准教授・小島徳朗講師、中国にて研修
 9月8日～9月19日 堀口豊太教授、アルゼンチンにて研修
 9月12日～9月25日 池上俊郎教授、シンガポールにて研修
 9月13日～9月25日 《ONE, TWO》大塚朝子／杉浦美江／西上翔平
 （京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）
- 9月14日～9月25日 『《預言者》伊東宣明 個展』
 『京都市立芸術学大学院彫刻専攻による展覧会《チント
 ンカンカン》』（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）
- 10月1日～12月18日 収蔵品展「後期展」（芸術資料館）
 10月1日～12月31日 2011年度ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（イギリス）・ノヴァス
 コシア美術大学（カナダ）・エコール・デ・ボザール（フランス）・
 エンサッド（フランス）・アールト大学（フィンランド）・シドニー
 大学（オーストラリア）交換留学生派遣及び受入れ
- 10月1日～11月13日 文化庁メディア芸術祭京都展《パラレルワールド》関連
 企画《共創のかたち～デジタルファブリケーション時代の
 の創造力》（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）
- 10月21日 特別授業プロジェクト 津田睦美氏特別授業
 （大会館ホールプラザ）
- 11月5日～11月7日 2011年度芸大祭
 11月8日～11月13日 ひろいのぶこ教授、オーストラリアにて研修
 11月11日～11月23日 中井恒夫教授退任記念作品発表
 『文化庁メディア芸術祭京都展「パラレルワールド京都」関連企画展
 ルネサンス～京都・映像・メディアアート』（京都芸術センター）
- 11月13日～11月18日 大学院美術研究科修士課程入学試験
 11月18日 特別授業プロジェクト イングリッド・レデント氏特別
 授業（中央棟講義室1）
- 11月18日～12月11日 日本ベルギー版画国際交流展（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）
 11月22日～11月28日 四条ストリートギャラリー（四条通 金融機関、一般店舗など）
 11月24日 大学院美術研究科修士課程入学試験合格者発表
 12月1日～12月7日 留学生展（京都芸術センター）
 12月14日～12月25日 潮江宏三教授退任記念展「銅版画家ウィリアム・ブレイク」
 （京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）
- 12月15日～12月25日 可塑的な抵抗：Plasticity and Civil Disobedience
 （京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）

■会員消息

(2011年3月～2012年2月)

会員作品展

<2011年>

- 3/9～3/15 三代加藤溪山青瓷展
いよてつ高島屋6階美術画廊・愛媛県松山市
- 3/17～6/12 プリズム・ラグ 手塚 愛子の糸、モネとシニャックの色
大山崎山荘美術館
- 3/22～3/27 國松 万琴展 BUON VIAGGIO II - 旅のかたち -
ギャラリー恵風・京都
- 3/29～4/3 黒田富紀子展
ギャラリーヒルゲート・京都
- 4/19～5/1 小島 徳朗展 tableau/sculpture
アートライフみつはし・京都
- 4/25～4/30 もうそう展 井川 萌～プチ個展 Week～
Art Gallery「be 京都」・京都
- 4/26～5/8 廣田 美乃展
ギャラリーモーニング・京都
- 5/7～5/15 佐野 暁 漆展 くまさん
祇をん小西・京都
- 5/7～5/19 並河富美代展 明るい方へ明るい方へ。
ギャラリー風・大阪
- 5/10～5/15 樫木 琴子作品展 (④)
ギャラリーヒルゲート・京都
- 5/13～6/5 堂東 由佳個展「呑気な時間、嫌な予感」
GARELLY IND.・大阪
- 5/16～5/21 大草 肇展
番画廊・大阪
- 5/20 谷澤 紗知子個展「会場」
VOICE GALLERY・京都
- 5/20～6/11 森林食堂個展「出張カレー屋のすべて」
VOICE GALLERY・京都
- 5/24～6/5 小田 英之+「明日見る夢」展
ギャラリーモーニング・京都
- 5/25～5/31 松生 歩展
京都高島屋美術画廊・京都
- 5/31～6/5 大東 純子展
アートスペース東山・京都
- 6/1～6/5 岡田 親彦 創作ガラス展「鳴子百合とことり」
藤田美術館ホール・大阪
- 6/7～6/12 高田 哲士展 (⑤)
ノリタケの森ギャラリー・名古屋
- 6/11～8/28 名和 晃平・シンセンズ
東京都現代美術館企画展示室・東京
- 6/20～7/2 渡辺 信明展「アサメヨシ」
ギャラリー白・大阪
- 6/21～7/3 福村 真美展
ギャラリーモーニング・京都
- 6/28～7/10 岡田 親彦 創作ガラス展「ジープンが大好き」(①)
ギャラリーマロニエ・京都
- 7/13～7/19 内藤 英治 藍・型染展
高島屋京都店6階美術画廊・京都
- 7/23～7/31 フルイミエコ展 相生・あいおい (②)
御池画廊・京都
- 7/23～8/3 日本の四季を描く 吉野 晃生 近作展
ギャラリー壹零参堂・鎌倉
- 9/11～9/30 中西 瑞季展 - イスから3cm -
アトリエ2001
- 9/24～10/2 井川 健・漆 -
楽空間祇をん小西・京都
- 9/26～10/1 田中 美和展 (⑦)
ギャラリー白・大阪
- 9/27～10/9 中井 敦子展 ことばにだせないこと
ギャラリーモーニング・京都
- 10/1～11/23 UNTITLED (版画) 大西 伸明展
兵庫県立美術館アトリエ1・兵庫
- 10/4～10/16 田島 征彦個展 そうべえ ふしぎな りゅうぐうじょう
ギャラリーヒルゲート・京都
- 10/4～10/30 田中 美和展 (⑦)
CAP STUDIO Y3・神戸
- 10/14～10/30 木村 秀樹展
アートゾーン神楽岡・京都

- 10/18～10/23 入澤あづさ展 ギャラリーはねうさぎ・京都
 10/25～10/30 服部しほりの日本画展『俺の園』 Gallery i
 10/25～11/16 鶴田 憲次展 - niwa - アートスペース東山・京都
 11/1～11/7 道原 聡 絵画展 イタリアの光と風と大地につつまれて (③)
 三越広島店7階三越画廊・広島
 11/1～11/30 Hello♡Kumasan 佐野 暁URUSHIexhibition
 BAMiGallery・京都
 11/3～11/27 祈るかたち 栗本 夏樹展 枚方市御殿山生涯学習美術センター・枚方
 11/8～11/17 大森 翠展 (⑧) SESSION HOUSE GARDEN・東京
 11/10～11/22 KOBE・モノクロームの眺め - 西田真人 日本画下絵展 -
 こうべまちづくり会館
 11/11～11/23 並河 富美代展・樹々のことば - (⑥) ギャラリーコジマ・彦根
 11/11～11/23 ilinx 中井 恒夫 京都芸術センターギャラリー北・京都
 11/19～1/15 吉原 英雄 画家のドラマ 和歌山県立近代美術館・和歌山
 11/22～12/4 河井 菜摘 個展 (漆) ギャラリー恵風・京都
 11/26～1/21 樫木 知子展 オオタファインアーツ・東京
 12/1～12/6 松本 和個展 uijin 芝田町画廊・大阪
 12/4～12/20 山名 彩香 絵画展 神河町中央公民館・兵庫県
 12/6～12/25 浅野 均展 俵屋画廊・京都
 12/9～12/25 冬木 遼太郎個展 “SAYING” HI-NEST BLDG.
 12/10～2/19 日本画家・西田真人が描いた阪神大震災
 神戸市立博物館2階ギャラリー・神戸
 12/13～12/25 小池 一範展 ギャラリー恵風・京都

＜2012年＞

- 1/6～1/14 笹尾 周平遺作展 京都芸術センター・京都

①



②



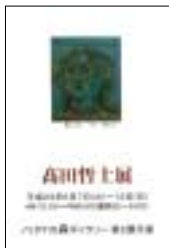
③



④



⑤



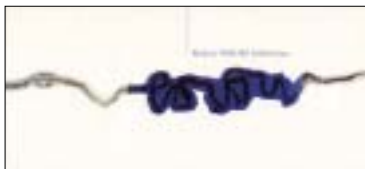
⑥



⑦



⑧



会員グループ展

〈2011年〉

3/8～3/13 第35回Q人の作品展

京都府立文化芸術会館・京都

井上 靖彦、宇井 恭子、奥田 迪、貴志 早苗、永田 正二、吉田恵美子

3/22～3/22 第七十二回 創紀展 併設 小松沙鬼 遺作展

京都市立美術館別館2階・京都

平田 豊、島谷 實、張 貫鎬、小森 文雄、安本 俊昭、宮田 朝地、
竹内由里子、入手 喜世、梶川千恵子、シマノ杏子、奥田 敏博、大島 晟栄、
榎 浩稔、秋田 直躬、疋田由香里、西澤 智子

4/4～4/10 第25回象展



東京・京橋ギャラリーくぼた3F・4F・東京
青木 弘年、安藤 邦典、石田 勇、
河野 裕子、櫻田 和子、水津 桂、
善入 正英、竹井 昌子、谷野 徹也、
津田 孝子、寺田 茂樹、中越 出、
中島 智恵、二階堂 忠、二宮 惇子、
原田 陽子、平島 光、藤田 清照、
藤宗 達子、古川 睦子、前垣内輝行、
水沼 伴次、水速 信孝、村上 幸子、
森 ふじ代、安森 正子、柳 和子、
柳田 輝子、山崎 和代、山本加代子、
吉田 敏子、吉野 晃生、依田 鏡子

4/9～5/29 Play/Pray あそぶ美術、おもう美術

豊田市美術館

中原 浩大、栗本 夏樹が出品

4/19～4/24 4人の立体造形作家展

アートスペース東山・京都

三宅 五穂、番浦 有爾、宮永 理吉、木代 喜司

5/1～6/5 潮音寺コレクションと現代染織作家展

染・清流館・京都

井隼 慶人、内藤 英治、曾根 亮子、近藤 卓浪

5/4～5/7 日本画4人展@美山里山舎

美山里山舎・京都府南丹市美山町

岡部 良平、谷内 春子、道園佳央理、土橋 藍

5/4～5/17 THE OSAKAN DREAMS

JR大阪三越伊勢丹6階「アート解放区」3階「DMO ARTS」

笹井 史恵が出品

5/9～5/14 第4回紅梅町版画工房展

Gallery H.O.T・大阪

稲垣由紀子、相坂 晄、栗野 秀一、大山 綱之、奥山 純子、越智 裕子、
折茂 敬子、梶 美奈子、木村 麻紀、小谷 廣代、笹川 秀昭、佐藤比佐子、
志木田理恵、清水祐貴子、高木 直美、橘 ユキヨ、豊島 舞、仲野久美子、
平野 絵梨、平光かおり、藤本 祐子、古田 陽子、松浦 学、松下 和美、
松村 景子、村田 有香、吉岡 純子、Kim Dunstan

- 5/16～5/28 gradation展 2kw garelly・大阪
松井沙都子、谷 友理子、吉岡 千尋、辻本 恵
- 5/17～5/29 Breeze2011 ギャラリーa・京都
赤松 玉女、井上よう子、奥田 輝芳
- 5/21 転置展シンポジウム 京都市立芸術大学ギャラリー・アクア・京都
加須屋明子、寺田 就子、野原 健司、森末由美子、吉村 熊象、寄神 くり
- 5/31～6/5 12seasons【12人の現在】(⑨) ギャラリーヒルゲート・京都
石田 歩、石田 眞弓、大志万伸子、佐川 俊浩、田中 直子、長尾まさ子、
野津 寿子、福井 研一、古橋 美鳥、堀内たかみ、真木 智子、山本 俊夫
- 5/31～6/5 創層展 京都市美術館別館・京都
小嶋 悠司、池田知嘉子、浅野 均、石股 昭、綾田 勝義、小池 一範、
清水 豊、鳥原 健次、與倉 玲、小島 徳朗、滝村 彩子、織田 涼子
- 5/31～6/12 Ametsuchi Aruse prinz
芦田 尚美が出演
- 5/31～7/10 新incubation3「On a Knife Edge - 二つの向こう岸」展 京都芸術センター
松井 智恵、朴 賢京
- 6/10～6/21 魅せる食卓展～4作家が饗宴するテーブルコーディネート～
アート○美空間Saga
栗本 夏樹が出演
- 7/5～7/10 第8回現代日本画の試み展×表具師 栗山 知浩 ギャラリーマロニエ・京都
沖谷 晃司、吉岡紗知子、若林 静香、福井 悠、豊永 杏奈が出演
- 7/8～7/18 epiphany 中之島デザインミュージアム・大阪
岡田真希人、来田 猛、高橋 卓久 真が出演 森山 貴之が企画
- 7/9～8/21 日本画きのう京あす 京都文化博物館・京都
西田 真人、綾田 勝義、小池 一範、川嶋 渉 他 会員出展者多数
- 7/12～7/17 2011(第23回)花と土と人展 セントラル・アートギャラリー・名古屋
今西 英雄、大河内久男、大野 幹彦、田中芳代子、宮島みどり、小池 かよ、
小島東洋治、小島知恵子、高田 哲士、所 征男、長尾 寛子、小塩 薫、
佃 秀實、堀井 隆、田中 義夫
- 7/13～7/21 第25回日本金属造形作家展 神奈川県民ホールギャラリー・横浜
森田玖吾が出品
- 7/19～7/24 京都市立芸術大学 美術教育研究会 2011双線美術京都支部展
ギャラリー吉象堂・京都
赤沢 嘉則、荒瀬 隆造、明星 神次、池田 一良、泉地 道子、上田 康雄、
大嶋八重子、落合 肇子、神谷 紅子、河合 美佳、北野しげとし、喜田 健嗣、
澁田 純(故)、高岡 秀造、西井 正氣、西小路怜利、平岡 潤、松田 高治、
松元 雅夫、ミネマツシゲホ、宮田 啓子、森川 修、鷺尾 景子、渡辺 勤
- 7/29～8/3 第23回4B展(京都市立芸術大学美術教育研究会兵庫支部) 南天荘画廊・神戸
青木 操、石河 俊彦、石橋 英二、井上 直、請田留美子、金子 政昭、
河合 富美、北里 桂一、小林くみこ、小宮 容一、雑賀 淳、新賀 千鶴、
善住 芳枝、武田 育子、田中 一好、塚脇 淳、辻井 利夫、鳥越 清敏、
永井 逕一、中田 誠、中田 彩子、中西 和夫、中野 素子、西堀 裕恵、
橋本 美保、長谷川美和、平内 安彦、福井 研一、藤村 仁朗、藤本 典子、
榊田千鶴子、三浦 孝宣、森本由紀子、吉村 佳子

- 8/10～8/14 帆の会展 京都文化博物館 5 階・京都
澤田 重克、森脇 勤、曾根 唯夫、高橋 顕児、樫田 明夫
- 8/18～9/4 ギャラリーかもがわ 7 周年記念 7 曜星展 (⑩) ギャラリーかもがわ・京都
荒瀬 隆造、太田眞素巳、落合 峰子、貴志カスケ、佐久間嘉明、佐野 賢、
西嶋 勝之
- 8/22～9/3 いきづく空間 - 未完の成 ギャラリー白・大阪
大船 光洋、近松 素子、長谷川 睦
- 8/27～9/17 ジパング関連企画 - 上田 純平・渡辺 佳織・染谷 聡グループ展 -
イムラアートギャラリー・京都
上田 順平、染谷 聡が出演
- 8/31～9/21 (大阪展) 9/28～10/10 (京都展)
ジパング展 アートの黄金郷ZIPANGU - 31人の気鋭作家が切り拓く、現代日本のアートシーン
(大阪展) 大阪高島屋 7 階グランドホール
(京都展) 京都高島屋 7 階グランドホール
上田 順平、樫木 知子、染谷 聡、三瀬夏乃介、龍門 藍が出演
- 9/3～10/2 荒瀬 隆造 道原 聡二人展 三良阪平和美術館・広島
- 9/3～11/13 フィギアたちの人生 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA
金氏 徹平が出演
- 8/27～9/4 朝鮮学校ダイアログ
- もうひとつのジモトの「風景」と「記憶」のアートプロジェクト - (⑫)
旧岡山朝鮮初中級学校・岡山
岡田 毅志が現地制作・作品展示
- 9/14～9/19 「美田小の実験」(⑬) 元・美田小学校・島根県隠岐郡西ノ島町
岡田 毅志がアートディレクターとして展示構成・作品展示
- 9/17～11/23 六甲ミーツ・アート 六甲カンツリーハウス、六甲高山植物園、六甲ケーブル
金氏 徹平、林 泰彦、中野 裕介、染谷 聡、伊藤 彩、石塚 源太、
安藤隆一郎
- 10/8～10/16 池上遊覧鉄道 日々是好日Artlink2011 (⑪) 池上泰川邸・岡山
伊達 伸明、岡田 毅志
- 10/18～10/23 清水 美沙展×福田 季生展 GALLERY恵風・京都
- 10/18～11/6 関秀2.0複数のベクトル、あるいはキャットファイト CAVE
尾家 杏奈、栗田 咲子、高田 智美、中田 有実が出演
- 10/25～11/6 TARO LOVE展岡本太郎と14人の遺伝子 西部渋谷店A館7F特設会場・東京
若木くるみ、上田 純平が出演
- 11/8～11/20 川村悦子×清水六兵衛 二人展『茶の空間』 ギャラリー恵風・京都
- 11/11～12/24 青木 陵子+伊藤 存「9才までの境地、そのころの日射し」展
タカ・イシイギャラリー京都
- 11/14～11/19 3 人展 あーとスペース夢玄・大阪
河野 裕子、鈴木 治男、増谷 和代
- 11/19～11/20 萬福寺芸術祭 黄檗宗総本山・宇治
松井沙都子、松本 和、宮永 亮、山下 耕平

- 12/13～12/25 漆の飾り ギャラリー恵風・京都
安東 智香、栗本 夏樹、佐々木友恵
- 12/13～12/25 Present Spirit 2011 ただひとつだけの ギャラリーモーニング・京都
マツモトヨコ、廣田 美乃、福村 真美、山部 泰司、成山 亜衣、見崎 慶一、
河崎 ひろみ
- 12/23～12/25 Chatterbox/ヒトの鳴き声 MATSUO MEGUMI+VOICE GALLERY
(2012年1/7～1/27)
高橋 悟、倉智 敬子

⑨



⑪



⑩



⑫



⑬



■同窓会賞

平成23年度（2011年度）作品展 同窓会賞受賞一覧

専攻	作品題目	氏名	学年
日本画	教王護国寺所蔵伝真言院両界曼荼羅 「胎藏界曼荼羅」 模写（部分）	松本 慎	4
油画	こんにちは、ミス・ジョーンズ	新平 誠洙	4
造形構想	Radio Music	高橋卓久真	修2
版画	hukei for all	宮田 雪乃	修2
彫刻	幸せは突然！！見えないときも注意して	雑賀 通浩	4
ビジュアル・デザイン	MOTION SENSE	山崎 綾子	修2
環境デザインデザイン	Air.filter	藤川南津子	修2
プロダクト・デザイン	Hei (book collectionのための収納家具)	金 秀娟	修2
陶磁器	衝動	塚本春日美	4
漆工	流	畑 景子	4
染織	隣りあう	二村 実希	4
保存修復	(該当なし)	—	—
芸術学	「地域系アートプロジェクト」の アウトリーチ的役割－表現活動を 中心とした多面的相互作用の生成－	増田 愛美	修2

■編集後記

昨年はほんとに大変な1年でした。多くの人が自分に出来ることは何かと様々な事を考えさせられもしました。京都芸大においても、建畠新学長を迎えての1年でしたし、来年度からは法人化という荒波が待っています。大きく変わるもの、変わらないもの、蓋を開けてみないと判らない不安を抱えながらの船出になると思いますが、今後とも同窓会の方々のご支援をお願い申し上げます。

長い間この編集に携わっていただいた宮本先生に代わり、新しく「象」の編集に漆工の安井先生に加わっていただいております。

(編集担当)

京都市立芸術大学美術学部同窓会

